

その他

フィリピン貧困地域における 「国際看護学演習」の学生の学びに関する一考察

The study of students' perspectives by the International nursing study
abroad program in rural area of the Philippines

奥村 真美

Masami OKUMURA

抄 録

本研究では、フィリピン貧困地域における「国際看護学演習」の学生の学びと、その学びが学生の看護に対する考えにもたらした効果を明らかにすることを目的とした。演習参加者のうち研究協力の得られた6名を対象に、質問紙によるデータ収集を行い、自由記載の内容について分析を行った。本演習での学びでは【看護に対する考えの深まり】【異なる文化・価値観】【子どもにとっての遊びの重要性】【貧困地域における保健・医療の課題】の4つのカテゴリー、看護に対する考えにもたらした効果では【看護の方向性の明確化】【看護を学ぶ姿勢の変化】【日本での生活に対する価値観の変化】の3つのカテゴリーが抽出された。

学生は本演習を通して多くの学びを得ており、それらの学びが学習の動機付けとなり、看護に対する関心を高め、自分が行いたい看護の方向性を明確にするという効果をもたらしていた。

キーワード ■ 国際看護, 海外研修, 貧困地域

はじめに

グローバル化に伴い他国とのつながりが密になってきていることを背景に、海外で生活する日本人や日本で暮らす外国人が増加し、看護においても外国人を対象とした援助を行う機会が増加している。さらに、経済連携協定締結により日本国内で働く外国人看護師が今後増加していくことが予測される。そのような社会の変化に応じて、国際的視野をもつことの重要性が認識され、2009年の看護基礎教育カリキュラム改正により、看護基礎教育の中で国際化に対応

しうる能力を養える内容についての教授が統合看護の中に位置づけられることとなった¹⁾。カリキュラム改正を受けて、看護系の大学を中心に国際看護学の演習を海外で行う看護教育機関も増加してきており、海外演習において学生が様々な学びを得ているという報告がされている²⁾。国際看護学は講義で知識を習得するだけではなく、実際に日本とは異なる文化を持つ国や地域に身を置く事を通して異なる文化を理解し、さらに、看護や医療がその土地の暮らしや文化に根付いていることを理解する土台を形成することができる³⁾。それぞれの国や地域の文化に根付いた看護のあり方を理解することは、単に国際的な場面での看護のみに必要とされるわけではない。看護を多様な視点から見つめ、対象を理解しようとすることは、看護師としての感受性や適応力、判断力を育成することにつながると考える。

本学では、1回生に「国際看護学」を開講し、2回生には選択科目「国際看護学演習」としてフィリピンでの海外演習を実施している。フィリピンは近年の経済発展に伴いGDPは緩やかに上昇してきているが、都市部と地方の経済格差は大きく貧富の差が大きい。総人口の25.8%が低所得者であり貧困生活を余儀なくされている⁴⁾。そのフィリピンの貧困地域で、一人の日本人助産師が診療所兼助産所を開設し医療活動を行っている^{注)}。診療所はフィリピンの貧困地域に開設され、日本人助産師は貧困層を対象に10年以上にわたって出産介助だけでなく、様々な患者に対する無料の診療活動を行っている⁵⁾。しかし、どんなに支援をしても貧しい人々の生活が変わらない現実には、貧しさの連鎖を断ち切るためには子どもの教育が必要だと考え、学校へ通えない子どもの特別授業・補習等を行う施設が開設された。子どもが日々の労働から抜け出し、学ぶ機会を作り、大人から愛情を受けて育つ場となるように活動している。本学における「国際看護学演習」では、その日本人助産師の活動の見学や現地での看護実践を通して、日本での看護活動との違いや異文化背景を持つ人々との相互理解の方法を学ぶ。そして、その体験が異なる文化の理解や多様な看護の可能性についての関心を深め、今後看護学を学んでいく上での動機付けとなると考える。

本研究ではフィリピンの中でも貧困地域に焦点を当て、同地域で行った国際看護学演習における学生の学びと、その学びが学生の看護に対する考えにどのような効果をもたらしたかを明らかにすることを目的に調査を行った。

フィリピンの保健・医療の現状

フィリピンはアジア大陸の東南方の海上にある大小7109個の島々からなる国である⁶⁾。熱帯モンスーン気候帯に属しており、台風や集中降雨による水害が多く発生する。また、世界有数の火山国であり、地震が多発する。このような災害による被災者の多くが貧困層に集中している。これは、貧困層の人々は中洲や川沿いなどの土砂災害の危険が高い場所に居住せざるをえないためである⁷⁾。

フィリピンは近年経済発展が著しい国の一つであるが、フィリピン国内における貧富の差が大きく、高所得者層は都市部に集中し、地方の農村部ではより高い貧困率となっている⁸⁾。フィリピンでは、経済力によって受けられる医療の質が大きく左右される。都市部の富裕層向けには高度な設備の整った私立病院もあるが、農村部では無医村の地域も多く、医療機関までのアクセスが悪いために、特に貧困層においては、経済的理由から病院へ行かずに自宅で我慢して重症化するケースが多い⁹⁾。

また、貧困は子どもの教育へも影響を与えている。フィリピンでは子どもは『労働力』として捉えられ、家庭の経済的理由から公立小学校入学者の30%ほどの生徒が卒業しないまま学校を離れ、ハイスクール入学者の約半数が卒業できずに中退している⁷⁾。様々な理由で学校へ行けず教育を受けられなかった子どもは、正しい知識や考える能力を身につけられなかったばかりでなく、人との関わりにおいても困難さを抱えている場合が多い¹⁰⁾。

国際看護学演習の概要

1. 演習の目的

開発途上国での実践活動の体験から看護のもつ力について考える

2. 演習参加学生

選択科目である国際看護学演習を履修した2回生の学生10名

3. 演習場所

現地演習場所はフィリピン共和国・スービックにある、日本人助産師が活動している貧しい地域住民のために開設された診療所兼助産所（以下「診療所」）と学校へ通えない子どもの特別授業・補習等をしている施設（以下「学校へ行けない子どものための学校」）である。学生はこの診療所と学校へ行けない子どものための学校で、日本人助産師や現地日本人スタッフ、フィリピン人スタッフらとともに、地域住民の診療やケア、子どもとの関わりを見学・体験した。診療所には、訪問者のための宿泊施設も併設されており、学生は演習期間中その宿泊施設で共同生活を行った。

4. 演習時期

2回生の集中講義期間中の2014年2月23日～28日に実施し、現地には5泊6日滞在した。

5. 演習内容

現地演習準備として、学内でのオリエンテーション及び語学研修を実施した。現地では、日

本人助産師が活動する診療所、学校へ行けない子どものための学校、施設の周辺地域等で演習を実施した。帰国後、演習での学びをまとめ、発表会を実施し学びを共有した。演習内容の詳細は表1に示す。

表1 国際看護学演習の内容

	場所	内容
事前学習	<学内>	・フィリピンの概要、現地活動についてのオリエンテーション ・英会話の講義と英会話を用いた基礎看護技術の演習 ・現地活動の準備
現地活動	<現地> ①診療所	・午前：日本人助産師の診療の見学及び援助の実施 ・午後：診療所で出生した子どもの新生児訪問、遠隔地の巡回診療に同行 ・出産見学
	②学校へ行けない子どものための学校	・地域を訪問し、青空教室開催 ・子どもたちと遊びを通しての交流
	③地域の子どもの居住地	・学校へ行けない子どものための学校で関わっている地域の子どもの家庭訪問 ・フィリピンの貧困地域の生活を体験
	④学生の宿泊施設	・冷房やテレビ・インターネットなどの娯楽設備がない中での共同生活 ・フィリピンの伝統的な料理
学内発表会	<学内>	・国際看護学演習の学びについての発表会

研究方法

1. 研究対象

国際看護学演習に参加した学生のうち、研究参加の同意が得られた2回生の学生6名。

2. データ収集期間

2014年7月

3. データ収集方法

「国際看護学演習」終了後、国際看護学演習での学びと国際看護学演習での学びが学生の看護に対する考えにもたらした効果に関して作成した質問紙に基づきデータを収集した。調査用紙へは無記名で回答し、得られたデータはコンピュータによって処理した。

4. 分析方法

質問紙の自由記載項目①フィリピンの現地で体験・見学したことで得られた学びについて、②その学びがこれから看護を学んでいく上で自分自身にどのような効果があったか、③「国際看護学演習」に参加して卒業後の自分が目指す看護についてどのような変化があったか、について得られたデータから、国際看護学演習での学びとその学びによる効果に関する内容の記載を抽出し、類似性のあるものをまとめてカテゴリー化した。また、研究者が観察した演習中の学生の活動の様子を結果に追記した。データの分析の際は信頼性・妥当性を得るために質的研究に精通した看護系大学教員などからスーパーバイズを受けた。

5. 倫理的配慮

質問紙に本研究の目的、調査結果は本研究のみに用いること、得られたデータは個人が特定されることがないように匿名化して分析を行うこと、研究への参加は自由意思によるものであり研究への参加を辞退した場合でも不利益が生じることはないことを記載し、質問紙の返却をもって研究参加への同意とすることとした。また、研究参加の依頼については本科目の成績が確定した後に行い、学生に対してもその旨を伝え了承を得た。なお、本研究は佛教大学の倫理審査委員会の審査を受け承認を得ている。(承認番号 H25-42)

結果

1. 研究参加者の背景

対象者6名中、海外渡航経験があったのは3名であった。渡航先としては、アメリカ、オーストラリア、中国、韓国などで、数日から10日以内で観光目的などの短期渡航であった。

2. 分析結果

質問紙の自由記載から得られた79の回答をデータとして分析した結果、以下のようなカテゴリーが抽出された。詳細は表2, 3に示す。

1) 「国際看護学演習」における学生の学び

演習に参加した学生の学びとして【看護に対する考えの深まり】【異なる文化・価値観】【子どもにとっての遊びの重要性】【貧困地域における保健・医療の課題】の4つのカテゴリーが抽出された。

(1) 看護に対する考えの深まり

日本人助産師はどの患者にも診察した後で必ずマッサージを行っていた。学生は日本人助産師の指導を受け、患者へのマッサージなどのケアを実施し、自分が行ったケアによって多くの人が笑顔で帰っていったという体験から「マッサージを行うことで身体が楽になる」ことを知り、「本当に大切なのは実際に触れて手当することだと思う」と患者の身体に触れてケアすることの重要性を学んでいた。そして、様々な患者の症状やそれに対する日本と異なる援助方法の見学から「最先端の医療が全てではない」「臨機応変に判断することが大切」だと感じていた。また、診療活動を通して血圧が200mmHgを超えているにもかかわらず頭痛を訴えることもない地域住民がいることを知り、「教科書が全て正しいわけではない」今起こっていることを正しく判断するためには「目の前にいる人をよく診ることが大切」であることを学んでいた。さらに、学生は現地語や英語を習得してはいなかったが、身振り手振りをういて気持ちを伝えようとすることでコミュニケーションをとることができた経験から「言葉が通じなくても気持ちを伝えることができる」という非言語的コミュニケーションなど、看護に対する考えを深め

ていた。

(2) 異なる文化・価値観

診療所の設備が整っていない中での診療活動を通して「日本と異なるマッサージなどのケアが主流」であり「ここでしかできない医療もある」とケア方法についての気づきがあった。また、貧困地域では、住民はインフラ設備も十分に整っていない環境や、その日食べる物にすら困る状況の中でも日々の生活を営んでいることを知り、「人が生きるためには本当にシンプルなものしかいない」と感じていた。現地は便利な物がないからこそ「自然のままに過ごせる場所」で、人々がお互いに助け合いながら生活している姿から「日本人が忘れかけている思いやり」を実感していた。逆に、貧困地域の人々の生活と日本での生活を比べ「食事を残すという日本では許される文化が恥ずかしいものだ」と感じていた。このように、日本と異なる地域でその地域の生活に触れ、異なる文化や価値観に気づく体験をしていた。

(3) 子どもにとっての遊びの重要性

現地の貧困地域には労働のために学校へ通えない子どもが多くいた。学生は学校へ行けない子どものための学校の活動の中で子どもと遊びを通して関わることで「子どもたちの素直さ」を感じ「働いている子どももやっぱり遊びたいと思っていることが分かった」と感じていた。しかし、活動に参加している子どもの中には人と上手く関わりを持てない子どもも多い。学校へ行けない子どものための学校ではそういった問題を抱えた子どもに遊びを通して関わることで、基本的な生活習慣や人との関わりについて教えている。その活動を通して「子どもの時に遊ぶことが大切」だということを学んでいた。

(4) 貧困地域における保健・医療の課題

貧困地域における診療や家庭訪問の体験から「高血圧の人が多い地域がある」「食べ物は添加物がたくさん入っていきそうで食生活は（日本とは）違うところが多かった」ということに気づき「予防意識が低い」のではないかと感じていた。さらに、「日本ではみられないケガや重症児でも治療できていない（現地の医療と比べて）日本の医療制度は整っている」と感じていた。

2) 「国際看護学演習」での学びが学生の看護に対する考えにもたらした効果

「国際看護学演習」の効果として【看護の方向性の明確化】【看護を学ぶ姿勢の変化】【日本での生活に対する価値観の変化】の3つのカテゴリーが抽出された。

(1) 看護の方向性の明確化

学生は診療所で日本人助産師によるトラウベ桿状聴診器と自分の五感だけを頼りにした自然な形での分娩介助の見学を通して「助産師になりたいと思った」と具体的な進路を考えたり、患者の身体に直接触れてケアし患者の声に耳を傾けて関わることで、患者を少しでも楽にすることができるという看護の楽しさを感じる体験によって「相手の心に寄り添う看護がしたい」と自分が行いたい看護の方向性が明確になったと回答していた。そして「その人の人生の中で

私が行った看護が必要であった看護になればいいと思う」というように看護師になることへの明確な意志を固めていた。さらに、日本と異なり十分な医療設備がない中でも人を癒す看護ができることを学び「枠にとらわれない看護を目指したい」と回答していた。

(2) 看護を学ぶ姿勢の変化

学生は「(帰国後) 日頃から相手の気持ちを意識するようになった」と人との関わり方への思いが変化していた。さらに、現地の子どもと遊びを通して関わった経験から「どうしたら子どもが子どもらしくいられるだろうかと考えるようになった」と子どもに対するケアについて考えるようになっていた。さらに、実際の援助体験を通して自分の知識や技術が不足していることを痛感し「もっと勉強しようと思った」と勉強への意欲が高まっていた。

(3) 日本での生活に対する価値観の変化

学生は診療所に併設されている宿泊施設で、テレビなどの娯楽設備がない中で生活し「便利な日本の価値観しかなかったが価値観が変わった」と日本での生活に対する価値観が変化していた。また、日本人助産師から添加物が多く入った食品の摂取によって診療所の患者に癌や奇形の子どもの数が増えているということを聞き「食の安全性に気をつけようと思った」と現地の生活と比較し、日本での自分の生活を振り返っていた。

表2 国際看護学演習における学生の学び

カテゴリー	回答内容
看護に対する考えの深まり	<ul style="list-style-type: none"> ・本当に大切なのは実際に触れて手当てすることだと思う ・触れることの大切さを学んだ ・人の手のすごさを感じた ・マッサージを行うことで身体が楽になる ・教科書が全て正しいわけではない ・最先端の医療が全てではないと思った ・1500g (の低出生体重児) でも命は生きていける ・臨機応変に判断することが大切 ・目の前にいる人をよく診ることが大切なんだとわかった ・言葉が通じなくても気持ちを伝えることができる ・言葉が通じなくてもコミュニケーションをとることができた
異なる文化・価値観	<ul style="list-style-type: none"> ・日本と異なり患者に触れてケアすることが多い ・日本と異なるマッサージなどのケアが主流 ・ここでしかできない医療もある ・日本人が忘れかけている思いやりなどを実感できた ・(フィリピンの貧困地域は) 自然のままに過ごせる場所 ・食事を残すという日本では許される文化が恥ずかしいものだと感じた ・どこでも人は生きていける ・人が生きるためには本当にシンプルなものしかいない ・非科学的なこともフィリピンなら有りうると思えた
子どもにとっての遊びの重要性	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの素直さを感じた ・文化は違っても(子どもの本質は) みんな同じなんだということ ・働いている子どももやっぱり遊びたいと思っていることが分かった ・小児(看護学) で習った子どもは子どもらしくというのが理解できた ・子どもが子どもらしくいられない現実を知りショックだった ・遊ぶことの大切さを学んだ ・子どもの時に遊ぶことが大切 ・人との関わり方を学べなかった子どもたちは感情表現が苦手
貧困地域における保健・医療の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・高血圧の人が多い地域がある ・予防するという意識があまりない ・日本ではみられないケガや重症児でも治療できていない(フィリピンの貧困地域の医療と比べて) 日本の医療制度は整っているのだと実感した ・食べ物は添加物が多く入っているというので食生活は違うところが多かった

表3 国際看護学演習での学びが学生の看護に対する考えにもたらした効果

カテゴリー	回答内容
看護の方向性の明確化	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の心に寄り添う看護がしたい ・患者一人一人に寄り添った看護がしたい ・枠にとらわれない看護を目指したい ・母性看護の分野に興味があった ・助産師になりたいと思った ・なんとなく看護師になればいいかなと思っていたけど人の役に立ちたい ・その人の人生の中で私が行った看護が必要であった看護になればいいと思う
看護を学ぶ姿勢の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・日頃から相手の気持ちを意識するようになった ・どうしたら子どもが子どもらしくいられるだろうかと考えるようになった ・もっと勉強しようと思った
日本での生活に対する価値観の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・食の安全性に気をつけようと思った ・便利な日本の価値観しかなかったが価値観が変わった ・日本と異なる生活環境で改めて生活について考えた

考察

1. 「国際看護学演習」における学生の学び

1) 看護に対する考えの深まり

学生は日本人助産師の活動の見学・患者への援助体験を通して患者に手を差し伸べ心を込めて患者に触れるという看護の基本を学んでいた。現代のデジタル化社会の中では人との情報的な距離は近くなっているが、逆に若者が相手と正面から対峙してコミュニケーションを行うことや対人関係を持つことを苦手とするようになってきているといわれている¹¹⁾。実際に実習でも、学生から患者の身体にどのように触れていいのかわからないという言葉が聞かれることもある。そういった学生にとって、この演習を通して患者の身体に触れる体験をしたことは、看護の基本である人に触れることを学ぶ大変貴重な機会であったと考える。本演習に参加した学生は2年間看護の基礎を学んできた2回生である。日本の看護教育は戦後GHQの指導のもと西洋医学を基本にした現代医学を中心に教育が行われてきた。実習でも多くは日本の標準的な病院で、現代医学による診断・治療の現場を体験することになる。しかし、現地の活動で出会った患者の中には全てを現代医学で説明できるわけではない状態の患者もいた。そういった患者と接する体験から教科書が全てではなく「目の前にいる人をよく診ることが大切」だということを学んでいた。最新の医療機器の代わりに、医療者としてしっかり患者と向き合い、自分の五感を研ぎ澄ませて患者の状態を感じ取ろうとする姿勢が重要な体験であったと考える。これは、コミュニケーションについても同様である。コミュニケーションツールとして共通言語があることは会話をする上では便利ではあるが、共通言語があるからと言って全てを理解しあえるわけではない。学生は現地住民との非言語的なコミュニケーションでの関わりを通して、お互いが真剣に相手に向き合うことによって、気持ちを伝え合うことができるということを学んでいた。看護の対象はあらゆる人種や世代の「人」である。外国人だけでなく、言葉を覚える前の子ども、認知症やその他言語的なコミュニケーションが困難となった人が対象となることもある。今回、学生が体験した「言葉が通じなくてもコミュニケーションをとることができる

た」という感覚は、今後もあらゆる看護の場面で活かされていくであろう。このように、患者の身体に触れるということ、目の前の患者としっかり向き合い五感を研ぎ澄ませて患者の状態を感じ取ろうとすること、言語的コミュニケーションだけでなく非言語的コミュニケーションを用いてコミュニケーションを図ることなど、看護の基本となるものについて学び、看護に対する考えを深めることができたと考える。

2) 異文化に関する学び

日本の医療との違いについての気づきがあった。最新の医療機器がそろっているがゆえに、検査結果に重きを置き患者自身に目を向けることが難しい日本の医療現場と比べ、現地のように何もないからこそ、患者の身体に触れ、しっかりと患者の訴えに耳を傾けることを大切にするという「ここでしかできない医療もある」と感じていた。国際看護学は「自分とは異なる文化、異なる国や地域で、保健医療システムだけではなく、政治・経済・社会・教育・文化等、あらゆる状況を考慮しながら看護の知識や技術を適用していく看護である」¹²⁾と定義されているように、異文化の理解が重要である。先行研究によると、海外研修における学生の学びについては、多くの学生が異文化について理解が深まったと述べられている¹³⁾。本学の学生も現地の貧困地域の生活を体験し、自分の日本での生活を振り返り、異なる地域における価値観や文化の違いについて考えを深めていた。

フィリピンでは子どもは労働力と捉えられ、貧困地域では経済的事情によって就学を断念せざるをえない子どもが多い。学校へ行けない子どものための学校でも、様々な理由で学校へ行けない子どもや、働いている子どもが多くいた。学生は子どもが子どもらしくいられない現実を知りショックを受けていたが、子どもと遊びを通して関わることによって「子どもたちの素直さ」を感じ、「働いている子どももやっぱり遊びたいと思っている」と子どもについての理解を深めていた。また、人との関わりに困難さを抱えた子どもへの遊びによる関わりを通して基本的な生活習慣や人との関わりについて教える活動から「子どもの時に遊ぶことが大切」だということを学んでいた。子どもにとって遊びとは「情緒の発達を促し、社会性を身につけ、創造性を伸ばす」ために必要不可欠である¹⁴⁾。このことから、子どもにとっての遊びの重要性について学んだことは看護の視点として意義が深い。

また、貧困地域では医療施設が少ないことや経済的な問題から医療機関に受診できない人が多い⁹⁾。加えて、先にも述べたように貧困地域には家庭の事情で教育を受けられずに育ったために、正しく判断する能力を身につけられず予防意識が低いことや食の安全性について配慮されていないなど、現地の貧困地域における保健・医療の課題について学んでいた。

2. 「国際看護学演習」での学びが学生の看護に対する考えにもたらした効果

本演習に参加した学生は2回生であり、まだ看護の基礎的な内容しか学習しておらず、看護に対するイメージは漠然としたものであった。このような看護の専門職として学んでいく初期

の段階で実際の看護の場面に触れることは、看護に関する関心や学習動機を高め、看護師としての役割意識を向上させる効果があるといわれている¹⁵⁾。日本人助産師による自然な形の分娩介助を見学し、助産師の仕事の素晴らしさを感じ「助産師になりたいと思った」と具体的な進路についての回答もあった。また、実習の中で看護の楽しさを感じる体験、情報を理解し、快感情を抱く経験によって学生の内面に感動が起き看護そのものや看護を学ぶ動機づけとなるといわれている¹⁶⁾。学生は活動の中で自分の援助によって患者を少しでも楽にすることができるという看護の楽しさを感じる体験によって「相手の心に寄り添う看護がしたい」と自分が行いたい看護の方向性を明確にしていた。そして、様々なことに問題意識を持つようになり、学習への動機付けがされていた。日本と異なる国や文化の中での保健・医療の課題を学び、その中でも人間はたくましく生きていけること、日本のように十分な設備がなくても人を癒す看護ができることを学び「枠にとらわれない看護を目指したい」と看護の可能性を広げていた。

インターネットを使わず、時間を気にせずという日本とは異なる生活を体験し、学生たちは日本で当たり前と思っていることが、世界の中でも同じわけではないことを学んでいた。逆に、現地では日本のような便利なものがないからこそ、自然のままに過ごせ、生きていることを実感できるという体験をしたことによって、自分の日本での生活を振り返っていた。異なる文化や価値観に触れることで、先進国の生活の物質的な豊さだけではなく、人と人のつながりや人間の生きる力の強さなどが人の幸福につながることを実感し、改めて自分の生活を振り返り、日本での生活に対する価値観が変化したと考える。

結 論

フィリピン貧困地域における「国際看護学演習」での学生の学びとその学びが学生の看護に対する考えにもたらした効果について、以下のことが明らかとなった。

1. 「国際看護学演習」での学生の学びは、【看護に対する考えの深まり】【異なる文化・価値観】【子どもにとっての遊びの重要性】【貧困地域における保健・医療の課題】であった。
2. 「国際看護学演習」での学びが学生の看護に対する考えにもたらした効果は、【看護の方向性の明確化】【看護を学ぶ姿勢の変化】【日本での生活に対する価値観の変化】であった。

本研究の課題

本研究では、データ収集の実施が帰国から時間が経過した時期となってしまったことから、「国際看護学演習」での体験の記憶が薄れ、研究参加者が十分に自分の体験を思い起こすことが難しくなった。さらに、データ収集のために作成した質問紙の質問項目の検討が不十分であったために、研究参加者が「国際看護学演習」での体験を振り返り自分の思いを言語化する

ことが難しく回答者が6名という少ない人数となった。これらのことから、今回の研究で得られたデータでは研究参加者の深い体験の思いを十分に組み取ることができなかったと考える。今後はデータ収集時期や質問紙の内容を十分検討していく必要がある。本研究では限られたデータによる検討であり、研究結果を一般化することは難しい。また、調査は演習終了後1回実施したのみであり、調査を継続することによって、国際看護学演習での学びが学生のその後の看護にどのように活かされているのかを明らかにしていくことができると考える。

謝 辞

本研究を行うにあたりご協力いただきました研究参加者の学生の皆さま、ならびに本研究のフィールドを提供して頂いた富田江里子氏と倉本陽子氏、本論文作成に助言を頂いた日隈ふみ子教授と高橋亮准教授に心から感謝いたします。

注)

フィリピンで日本の看護師や助産師の免許が認められているわけではないが、貧困層を対象に10年以上にわたって出産介助だけでなく、様々な患者に対する無料の診療活動を行ってきた活動が認められ、日本人助産師が活動する施設が保健所として認可された。(富田江里子, フィリピンの貧しい人のためのクリニック< www.geocities.jp/erikoclinic/ > (2015/3/27 アクセス) より)

文 献

- 1) 小山真理子：新カリキュラムがめざすこと「看護基礎教育の充実に関する検討会」を終えて、看護教育, 48 (7), 555-562, 2007
- 2) 丹野かほる, 瀬倉幸子：ラオス国際看護学研修の学習成果と効果的な海外研修のあり方の検討, 第40回看護教育, 269-271, 2009
- 3) 須藤恭子, 樋口まち子：看護基礎教育における国際看護学実習の意義－学生の意識調査から, 看護教育, 53 (9), 786-791, 2012
- 4) Republic of the Philippines National Statistics office : Philippine Statistics Authority – National Statistical Coordination Board, <http://www.nscb.gov.ph/poverty/>, 2015/3/27
- 5) 富田江里子：フィリピンの貧しい人のためのクリニック, www.geocities.jp/erikoclinic/, 2015/3/27
- 6) 外務省：フィリピン共和国 (Republic of the Philippines) 基礎データ, www.mofa.go.jp/mofaj/area/Philippines/date.html#section1, 2015/3/26
- 7) 大野拓司, 寺田勇文：現代フィリピンを知るための61章 (第2版), 明石書店, 2009, 255-256, 70-71
- 8) バレスカスマリア：世界人権問題叢書1 フィリピンの子どもたちはなぜ働くのか アジアの子どもの社会学 (第3版), 明石書店, 1997, 256-261,
- 9) 河原和夫：フィリピン共和国の保健医療事情と医療保険システム, 医療と社会, 18 (1), 189-203, 2008
- 10) 富田江里子：フィリピンの小さな産院から, 石風社, 2013, 149
- 11) 辻大介：若者におけるコミュニケーション様式変化ポストモダンティ (社会情報研究へのアプローチ (2) ポストモダンと社会情報研究 (共同研究)), 東京大学社会情報研究所紀要 51, 42-61,

1996

- 12) DeSantis, L : The Relevance of Transcultural Nursing to International Nursing, *International Nursing review*, 35 (4), 110-116, 1988
- 13) 丹野かほる, 斎藤君枝, 他 1 名 : ミャンマーにおける国際看護研修とその学習効果, *新潟大学医学部保健学科紀要*, 8 (3), 143-150, 2007
- 14) 二宮啓子, 今野美紀 : 看護学テキスト NiCE 小児看護学概論子どもと家族に寄り添う援助, 南江堂, 東京, 2012, 223
- 15) 櫻井礼子 : 看護教育における初期体験学習の経緯と意義, *大分看護科学研究誌*, 1 (1), 20-26, 1999
- 16) 浅井直美, 小林瑞枝, 他 2 名 : 看護早期体験実習における学生の意味化した経験の構造, *北関東医学*, 57, 17-26, 2007

(おくむら まさみ 看護学科)